

LIVE: マンガンズ 1994.11.7 新宿アンティノック



photo by k.k.

新しい歌がいくつか聴けた8月1日のシェルターのライブがとてもよくて、それに10月15日の新宿路上ライブからは以前のようにマイクスタンドをふりまわしたりステージの上を休みなく動き回らずに歌うのかえって歌に力がこもって、聴く方にすうっとどいてくるようになってきていたからこの日のライブが待ちどうしかった。

最初が「ロシアン・ルーレット」で、ゆっくりゆっくり歌いながら歌の力が橋本にみなぎっていつているようで、その時まで私の中にサラッと流れていた時間と意識がそこでせきとめられ、だんだん息が乱れてきた。橋本が椅子にこしかけてアコースティック・ギターを弾きながら歌った「イサミさん」のときだけわずかに楽に息ができた以外は最後の「I I'S MY LIFE」の終わりまでずーっとそういう状態が続いた。後半はカメラをかまえることもできないほどだった。

床にすわって聴いていたのだけれど、ライブが終わったあと体が重くて立ち上がるのが大変だった。アンティノックの階段をヨロヨロとなんとか上がり、出口にうずくまったまま身動きができない。悲しいのではなく、苦しいのではなく、楽しいのではなく、ただ涙がこみあげてきてとまらない。そのままそこにずうとうずくまっていたいということしか頭になかった。掃りたくなかった。どこにもいきたくなかった。いつまでたっても涙がとまらない。どのくらいそこにいたのかわからないけれど、「掃らなくては」となんとか起き上がった。体が重くてフラフラだった。一步一步なんとか足を出すとうった感じで歩き、途中のコーヒー店で20分ほど休んで、また重い体を選んでやっと家にとどりついた。ふつうなら10分くらいで歩いて帰れるのに、アンティノックから家までがものすごく遠かった。こういう日に遭うと、こういうことについて書いてあるものを読んでたとえ深く納得したとしても、それはやっぱり言葉で理解たにすぎないということになってしまう。

91号に「(ロックンロールは)生きるための原動力であり、それに触れた人々の人生を変えて、自由へと息ぎなってくれる」というダニー・シュガーマンの言葉を載せているけれど、ああいう日に遭うのが生きるための原動力かどうかはまだわからないが、もしかしたら死を受け入れるための原動力かもしれないが、この日のライブでまったく自分が変わってしまったことは実感している。たくさんもの(物でも物事で人でも)がどうでもよくなってどんどん消えていつている。これから先どうなっていくのかもさっぱりわからない。混沌としているだけで、不安は感じない。

鈴木いづみが「ロックって、ふしぎなもんでさ、ずっと聞いていると、有名になるとか、お金もうけるとか、何か一つのことをやりとげるとか……そういうことに対する志向というのがだんだん減ってくるわけ。それで無名性に沈むというのが、ちっとも苦痛にならなくなつてね、何々家と言われたという欲望もだんだん少なくなるの」といつていたと「鈴木いづみ 1949~1986」で岳真也が書いているのを読んで「そうか、そういうことなのか」と教えられた。もしそのとおりなら、うれしいかぎりだ。

いずれは死ぬことを知っているのは人間だけです。この知に当面することによって始めて、人間の生は動物の生存を根本的に異なります。自分もお互い同士もすべてやがて死ぬことを知ることは、生存の相貌を変える程の決意を迫ります。

(中略)

そこで自己の死を確信することは、人生に陰鬱な影を投げかけるものではなく、むしろ人生の最も微妙なはげましにいたるまで清め、同時にあらゆる高慢や空虚な華美を戒めるものです。この確信こそ何が有意義であり、何が空虚であるかの判断を鋭くするものです。

ゲルハルト・H・シュワーベ

「日本と西洋の対話」(「自由」1967年6月号)

BOOK: 「阿部薫 1949~1978」(文遊社)

結局、表現するのは阿部薫に限らず誰にしても、やっぱり自分の<死>ということと向かい合わないと表現なんてできないわけでしょ。彼は<死>ということとキチッと向かい合って音を出そうとしてたわけだから、いつヒョコッと死神に呼ばれてもね(笑)。それはミュージシャンだったらいつでもそうだよな。そういうところタイプはちがうけど、陽性と陰性があるというか、人間の表向きタイプは違うけど、基本的には僕も同じだよな。ミュージシャンてのはある種の永遠のところとコンタクトしたいと思うし、永遠のエネルギーと直結して音を出したいという欲求がいつもあるわけで、永遠って何かというとやっぱり基本的には<死>だからねえ。(中略) そういう自分の行為を阿部はレコードに残すことがいやだったそうだけど、演奏するってことは聴いている人の唄というか、その中にレコーディングすることによ、だから別に同じだよな。僕の場合はレコードっていても、自分の中で使われてるからね。レコードっていてもいろんな意味があるわけでしょ……。

たとえばエリック・ドルフィーが言ったみたいだね。
"When you hear music, after it's gone in the air, you can never capture it again" っていうけど、あれはまったくインチキでね。音ってのは、鳴る前からもうそこに存在するし、鳴った後にもちゃんと存在してるしね。だから音がその消えた瞬間なくなるってのは、今生きてる時間軸を信用している人間がいうわけでしょ。僕は今の時間軸じゃないところで鳴っている音と一緒に演じたかったわけだし、今もそうだけど、そういう時間軸じゃないところに、自分の存在を……と思って唄を吹いているわけだしね。

阿部薫っていうと、よく悲劇のヒーローだとカドラッグのなんとかだとか言うけど、それは付随したイメージであって、もう生きたいように生きたんだから "That's the way he lived" って言うか、それでよかったんじゃないの。

何歳で死んだとかは関係ないよね、人間はね。 ——— 近藤等則

創ってる真っ最中ってのは言葉でつかまえられるし、言葉でつかまえられるときにはおわっているし、真っ最中ってのは言葉にできないね。それは非常に危ういよね。直感半分で生きているような。非常に危ういけれども、でも昨日までのことを知っているからね、類推するっていうか、多少ね。そんなときに拠り所になるのは誠実さね、あらゆる場面だよ。誠実であればいいものが出てくる。その人のいいところが絶対出てくる。何に誠実かっていえば、自分自身に誠実ってことにしかならないでしょ。そういう意味でこのテープのアルトは最盛期の頃と比べるとちょっとしんどいかもしれないけど、そういう誠実さってものは一木ちゃんと、阿部自身の誠実さってものはちゃんとある。ビュアな、意志的な生き方っていうか、すごい、いいレコードだね。聴いた人が誠実に生きているんだしたら、少なくとも昨日のこととして受け止められる。そのくらい力がある。聴く人が人生重ねるごとに阿部の音が生き返ってくる。人生の節目々々でね。必ずや。

あそこがああしてこうしてではないから、本当にビュアに出てくる。サクサク吹く体力がなくても、まったく音が出てなくても、あの態度ね、面と向かってそこから顔をそらさない態度、男らしいよね。だから阿部のヨレヨレのアルトサクサクをずっと聴いていられるのは、そこだね。ひとつも音楽が途切れない、すごいことだね、それは。(中略) 阿部のこういう音聴いてはっとする人いっぱいいるよ。その一人ひとりね、自分の中に起きる何かが一番の真実だと思うよ。

————— 吉沢元治



マンガンズ アコースティック・ライブ 1994.12.4.渋谷アピア

photo by k.k.